

N特別養護老人ホームにおける入居者の居場所と居室のしつらえに関する考察

個室型特別養護老人ホームを取り巻く環境と入所者の生活行動に関する考察 その2

正会員○楠木雄一郎\*\*

同 友清貴\*

同 西室田周作\*\*

居場所 痴呆程度 しつらえ

はじめに

前稿では、N特養の施設概要と入居者の基本属性を把握した。本稿では、N特養の実態調査で得られたデータを基に考察を行う。

調査主旨

実際に鹿児島市内にある個室型N特養で実態調査、インタビュー調査を行った。そこで個室的多床室の利用状況・入居者の居場所・痴呆程度からみた居室のしつらえ状況を調査し考察を行う。

調査内容

調査内容は下記の①～③に示したとおりであり、平成12年、11月16日に①、③そして②のIを11月20日、IIを11月24日にそれぞれ行った。

① 基本属性調査

\*前稿に記載

② 入居者の行動観察調査I・II

・入居者の行動観察調査I

8:00から19:00までの間、一時間ごとに全入居者の居場所を平面図上にプロットする。その際、属性とプロットした入居者とは一致させない。

・入居者の行動観察調査II

調査Iの後日、特徴が見られ、調査に適当と思われる入所者6名に限って同じ調査を行う。その際、属性とプロットする入居者とは一致させ、できる限り細かく行動内容までを記入する。

\*行動観察調査IIの調査結果は修士居論文で詳しく載せているが本稿では扱わないものとする。

③ 居室への私物の持ち込み状況調査

全ての居室の写真を撮り、大まかなものは平面上にスケッチし、本人の持ち込み品に関するコメントも記録する。また、個室の多少室における前室の利用状況についても記録する。

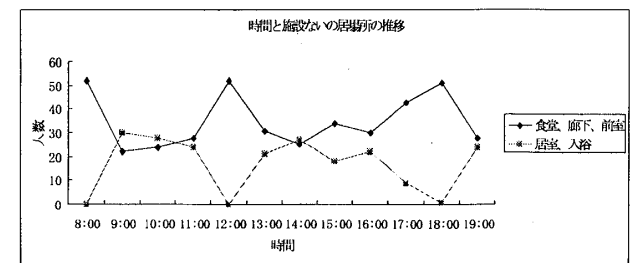
なお、調査に際して施設の普段のありのままの環境を把握するため、施設内での行事、祝日、土、日を避け平日を選び、またあらかじめ施設内の物品の移動がないように(居室内の物品を整頓しないように)重ねて対象施設をお願いをした。

行動観察調査I

行動観察調査Iを行った日の特養の全入居者数は52名である。入居者が食堂を居場所としている時が多く、食事のとき最高で98.1%が食堂に集まり食事を取る。平均64.7%の入居者が常に食堂にいるが、これはN施設で寝たきりにならないように日中は居室の外で過ごすという方針が大きな要因となっている。表より食事の時間である8:00、12:00、18:00は、食堂にほぼ全員がいるが、それ以外の時間帯では午前中は居室に、午後は食堂にいる人の方が多い。これは、施設内のプログラムとしてレクリエーションの時間帯が組まれていたためと考えられる。しかし、一日を通して見ても、食堂にいる人の数は多く、食堂で一日を過ごす人が多いことが考えられる。それ以外の人はほとんどが居室に戻っており、前室で会話をするといったコミュニケーションをとる人の姿はほとんど見られなかった。廊下を歩く人も見られたが、そのほとんどが居室へ向かう人や、徘徊している人であった。居室に戻った人の中には音楽を聴いたりテレビを見たりと、プライベートな時間を過ごしていたようである。

時間	食堂			人 (%)	前室・廊下 計 (人)	居室 計 (人)	施設全体 総計 人 (%)
	自立	車イス	歩行器				
8:00	20	28	3	51 (98.1%)	0	1 (1.9%)	52 (100%)
9:00	12	9	0	21 (40.4%)	1	30 (57.7%)	52 (100%)
* 10:00	15	6	1	22 (42.3%)	2	25 (48.1%)	52 (100%)
* 11:00	8	13	3	24 (46.2%)	4	21 (40.4%)	52 (100%)
12:00	20	28	3	51 (98.1%)	0	1 (1.9%)	52 (100%)
13:00	7	20	2	29 (55.8%)	2	21 (40.4%)	52 (100%)
* 14:00	9	11	2	22 (42.3%)	3	24 (46.2%)	52 (100%)
* 15:00	14	15	2	31 (59.6%)	3	15 (28.8%)	52 (100%)
* 16:00	10	11	3	24 (46.2%)	6	19 (36.5%)	52 (100%)
* 17:00	16	22	2	40 (76.9%)	3	6 (11.5%)	52 (100%)
18:00	20	28	3	51 (98.1%)	0	1 (1.9%)	52 (100%)
19:00	14	11	2	27 (51.9%)	1	24 (46.2%)	52 (100%)
平均	13.8	16.8	2.17	2.8 (64.7%)	0.8 (4%)	5.7 (30.2%)	52 (100%)

\* 10:00～11:30、14:00～5:30は入浴時間。入れ替わりで常に平均3人づつ入浴する。  
\* 割合 (%) は、総数52名 (ショートステイも含む) を100%としたときの値である。



図・3 時間帯ごとの入所者の居場所

A Study on "Place and Life Stylè" of Elderly Residents in N Nursing Home.

A Study one "Activity and Spacè" of Elderly Residents in Nursing Home With Priate Rooms.

KUSUNOKI Yuichiro, NISIMUROTA Shusaku, TOMOKIYO Takakazu

## 痴呆程度と居室のしつらえ状況

居室のしつらえの状態を高い・普通・低い3つの状態に分け、それと痴呆程度との関係を表にまとめた。

低い 生活に最低限必要なものを置いている。(A)

普通 居室での生活を促す物を置いている。(A+B)(A+C)

高い 個性的な生活環境作りを行っている。(A+B+C)

A: ベッド、タンス、介助器具、ゴミ箱、机、イス (支給される物)

B: テレビ、ラジオ、カセットテープ、雑誌、本、など (すべて私物)

C: 個人の家具、飾り、写真、植物など (すべて私物)

\*支給される机やイスは希望者のみ

個室 全13床

正常(痴呆なし)な入居者4名中3名が個性的なしつらえをしていた。重症の入居者の居室には、最低限の生活用品しかなくしつらえはみられなかった。中等症が2名、個性的なしつらえていたが、これは家族がよく訪れるためであり本人の意志によるものではない。

表2 痴呆程度としつらえ (個室)

痴呆程度	痴呆程度としつらえ (個室)			計 (人)
	高い (人)	普通 (人)	低い (人)	
正常	3	1	0	4
境界	1	0	0	1
軽症	1	0	0	1
中等症	2	1	2	5
重症	0	0	2	2

多床室 (2床室、4床室) 全36床

多床室の入居者は、痴呆程度の高い人が多くほとんどしつらえが見られなかった。同室者どうしの交流も行われず、多床室の長所が活かされていないかった。

表3 痴呆程度としつらえ (多床室)

痴呆程度	痴呆程度としつらえ (多床室)			計 (人)
	高い (人)	普通 (人)	低い (人)	
正常	0	2	0	2
境界	0	0	1	1
軽症	1	0	1	2
中等症	0	2	5	7
重症	1	4	19	24

## 居室のしつらえの事例

ここでは居室のしつらえにおいて、高い入所者と低い入所者の部屋の様子を示す。

## しつらえの「高い」入居者

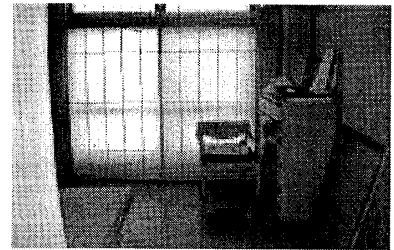
年齢 89  
性別 女性  
要介護度 1  
痴呆度 正常  
入所日数 9ヶ月  
ADL程度 1



タンスや机の他に収納棚を持ち込んでおり、持ち込み品数の多さを物語っている。タンスや机の上には飾り物・小物類が置かれ自分の趣味に使うと思われる折り紙・布きれ等が含まれていた。また、家族が写真や賞状などを持ち込むなど思い出の品を置いていた。

## しつらえの「低い」入居者

年齢 85歳  
性別 女性  
要介護度 1  
痴呆度 中等症  
入所日数 14ヶ月  
ADL程度 2



ベッドの他には施設側が設置したタンスしか置いて居らず、ゴミ箱がその隣に置いてある。室内ががらんとしていて寂しい印象を与える。生活の風景が全く感じられなかった。

## まとめ

以上にわたって、個室型特養における現在置かれている環境と入所者の施設内での生活行動、居室のしつらえなどの考察を行った。

入居者の居場所は、一日平均6割以上が食堂に残りその他は居室にいた。前室が談話スペースとしての役目を果たしておらず入居者の居場所が食堂か居室に限られていることがわかった。前室が利用されない要因として、まず第1に4床室には痴呆程度の子重の入居者が多く、会話を楽しむといった行為が行われにくいこと、2番目に前室の位置と広さに問題がありテーブルやイスを置くと車イスや歩行器の通行の妨げとなることが考えられる。また、介護職員の方にインタビューを行ったところ、痴呆の子重の方は他の入所者とうまくコミュニケーションが取れないようであるが、寂しさからか人の集まっているところに居たいというような話を聞いた。調査の対象のような7割以上がADL程度ほぼ全介助で8割の人が痴呆ありという特養では、前室というセミパブリックな空間が、段階的にコミュニケーションを図る場として上手く利用されにくいようである。

個室で生活する正常(痴呆なし)な入居者は、食事以外は自分の居室で生活することが多い。痴呆程度が低いほど個性的な居室のしつらえをする傾向にあり、居室を自分のプライベートな空間として生活していることが調査から伺える。この結果、痴呆の軽い入居者にとっては個室はその役目を十分に果たしていることがわかった。

施設計画において、入居者に占める痴呆の割合が増加傾向にあるにも関わらず、その生活行為についての理解に不十分な点が多い。今回ここでは言及しなかったが、介護者の立場からいえば、食堂にいる入所者の割合が多いということは、排泄の際のトイレへの移動や収納庫の広さ・位置といったことも問題になって来るであろう。今後、ますます増えるであろう後期高齢者や、痴呆入居者を考慮に入れた施設計画に関する研究を行っていく必要があるだろう。

## 参考文献

注1) 注2) 注3) 建築設計資料 71 特別養護老人ホーム

\* 鹿児島大学教授・工博 Prof., Dept. of architectuer, Faculty of Eng, University of Kagoshima, Dr. Eng.

\*\* 鹿児島大学大学院 Graduate school, Dept. of architecture, Faculty of Eng, University of Kagoshima